
薄桜鬼

沖川 美桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄桜鬼

【著者】

Z2333BA

【作者名】

沖川 美桜

【あらすじ】

ある冬の日の巡察の話。

一番組の巡察に同行していた千鶴はお千ちゃんといい、そのまま沖田さん、平助君を交えてお茶会が始まる。

(この話は勢いだけで書かれたものです。
初投稿なので誤字・脱字・文法間違いが予想されます。
ちなみに登場するのは

- ・千鶴ちゃん
- ・お千けちゃん
- ・沢田さん（やや少なめ）
- ・平助君（結構少なめ）
- ・斎藤さん（ほんの少しだけ）
- ・薰（蝶んじゃない + 斎藤さんより少ないかも）

原田さんほぼ空氣化しています

それでもいこ方のみびつがつ！…

(前書き)

この話は、勢いだけで書きました。
なので何が言いたいとかそんなのありませんーーー！

それでもOK?

これは、ある日の巡察のこと。

「…………今日も、父様のことは分かんなかったな」
私、雪村千鶴は消息不明の父を捜し京まで来た。
その時、新選組の秘密を知つてしまつて以来屯所で毎日を送つている。

最初は、不安だらけだつたけど今では巡察に同行を許してもらえた
り京に知り合いもできた。

「あ～～千鶴ちゃん～～」

呼ばれた方に目を向けると鮮やかな黄色の和服を着た、

「お千ちゃん～～久しづりだね～～」

京でできた女の子友達、お千ちゃん。

二人で会話に花咲かせていると、沖田さんが気がついて声を掛けて
きた。

「千鶴ちゃん達。」

「あ～～すいません～～！巡察の途中で話し込んで～～」

お千ちゃんに謝ろうとすると、

「巡察はもう終わり。隊士には先に帰つてもらつた。

せつからだから、ゆつくりお茶でも飲んだら？」

「でつ、でも土方さんが怒りませんか？」

そういうと、何故か沖田さんはほほ笑んで

「大丈夫。大丈夫。僕も近くにいるから。それに、ほら」

沖田さんが顔を向けた方向をみると、浅葱色の羽織を着た

「平助君！平助君も巡察？」

いつのまにか八番組組長の平助君がいた。

「巡察はもう終わったけど、千鶴たち見つけたから隊士たちには先帰つてもいいつた。」

「平助もきたし、いいんじゃない?」

平助君は、訳が分かつてなせそつだけどお千ちゃんが
「美味しい、お饅頭のお店を見つけたの。

お土産にもできるから行きましょ?」

その言葉に後押しされて、お茶会が始まった。

・・・・・

「そういえば、昨日一番組の永倉さん見たわ。」

「そなんだ。どんな様子だった?」

「新八さんのことだから、どうせ騒いでたんじゃない

「あー、たしかにそれ以外考えられねー」

「寒くないのかと思った。」

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」

（（（たしかに）（元）））

新選組の3人は、同じことを考えた。

しかし、

「・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの?急に黙り込んで。」

「・・・・・・・・・それ言つたら俺はどうなるのかと思つて。」

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」

確かに、平助君も薄着。

雪のちうつ季節にならうとも、どんなに暑い夏でも衣替えしたところを見たことがない。

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」

一沈黙一

「あー、千鶴ちゃんーお土産買わなくていいの?」

「やうだつた。買つてくるね!ー」

そう言つて、お店の中に入るところなお菓子が並べてある。

「どれにしよう~」

ふと皿」とまつた兎の形をしたお菓子。

（・・・この前、斎藤さんと雪の形をした皿を作った。）

「いれてくれ。」

「お千ちゃん……貰えたよー。お土産のお菓子。」

外に出ると、お千ちゃんは空を見上げた。

「・・・お千ちゃん？」

声をかけるとハッとしたように振り向いた。

「どうしたの？」

お千ちゃんは、少し考えてから

「幼いころ、千鶴ちゃんに似た友達がいたの。その子の家に行つた時に一人で見た空に、似てるなって思ったの。」

そう言われて、空を見上げた。

新選組の羽織のような青さの空。

そこにポツンと浮かんだ雲。

・・・・・どこか懐かしいような気がした。

「私も、この空を見てたのかもしないね。」

お千ちゃんは、ちょっととの間田を見開いて

「そうだったり、素敵よね。」

そう笑つてた。

私もつられて一人で笑いあつた。

「お千ちゃん、今日はありがとうね。」

楽しかったよ。」

「私もよ。千鶴ちゃん。」

また、美味しいお菓子のお店探しておへわ

・千姫・

「千鶴ちゃんはあの頃の」と、少しだけビミョー覚えていたのかしら・・・?

「そうだったり、嬉しいけどなあ。」

幼いころに千鶴と薰と遊んだこと。

「覚えてなくとも、また千鶴ちゃんとは遊べたけど・・・・・・

もう一人。

彼女の兄は、今何をしてるのか分からぬ。

「また、あんなふうになれたらな。」

街の中の雑踏にいる少女。
ふと、空を見上げた。
その眼に映るのは・・・・・・・・

- - - - - E N D - - - - -

読んでくださつてありがとうございました。

最初は、千鶴ちゃんとお千鶴ちゃんの会話だけで終わらすつもりが、何故か薰で終わりました（汗）

ちなみに、永倉さんの服の会話は実際に友達と話したことです。あの三人組の服は寒えつですよね・・・・・・

ちなみに、私の脳内では幼いころは千鶴と薰は超がつくほど仲が良くなっています。お千ちゃんもよく遊びに来ていたといつ設定です。

どうでしたか？

感想、など待つてます！
ぜひ送つてください！

読んでくださつて本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333ba/>

薄桜鬼

2012年1月5日22時46分発行